

コメント

安丸 良夫

御紹介いただきました安丸です。よろしくお願いします。コメンテーターには400ページはかなり重い本が与えられて（笑）、一生懸命読んだことは読みました。しかし、それぞれの論文は年季の入ったプロの研究者によって書かれた優れたもので、門外漢としては発言しにくいと思いました。また、ノラを書いた2つの論文が最初と最後に入っておりますけれども、これは記憶という問題を巡る理論的なもので、これはこれで歴史家がとりあげるのにはなかなか難しいところがあります。そこで日本の近代史との関係のところは牧原さんがおやりになると思いますし、それから理論的な問題は岩崎さんがおやりになる。すると私は別に何もすることは無い（笑）。何もすることは無いのに何か言わなければならないというのは大変つらいことで（笑）、やや無理難題を引き受けたなというふうに思ってます。で、これ読んでの最大の教訓は、迂闊に仕事は引き受けるもんじゃない（一同笑）ということですが、そういう後ろ向きなことばかり申し上げては、来会の皆さんに失礼に当たるかと思うので、自分なりに思ったことを以下申します。

私の話は、大きくは2つに分かれておりまして、前半では私が割り当てられた第1巻のうちノラの論文を除いた各論文について簡単なコメント、これはもちろん門外漢が言うことです

から、思いつきにすぎませんけれども、そういうことを最初に申し上げます。それから後半ではノラの論文を中心にして、日本史の方にひきつけて少しお話しさせていただきたいと思います。

ではまずはじめに、フィリップ・ジュタール「プロテスタント―荒野の博物館」をとりあげます。この論文は1702年から1704年にかけておこった、セヴェンヌという地方のユグノー農民の反乱、カミザールの乱というものについてのいわば記憶の分析、ということになります。カルヴァン主義というものは世俗的な記憶や記念を拒否するはずなのに、じつはこのユグノーの農民たちによって独自の記憶が持ち続けられた。そして、1911年にはその指導者の一人の聖地に博物館が設けられ、記念式典が開かれるようになった。カミザールの乱そのものはひとつの叛乱として、19世紀の半ばまではその記憶は抑圧され排除されるような性格のものであったのですが、19世紀の中頃におおきな転換がおこって、共和主義的な国民主義とでもいうべきものの中に組み込まれて、カミザールの乱は自由のための闘争や1789年のフランス革命の先駆とされるようになった。そういう意味で、共和主義的国民主義のなかに組み込まれるような記憶が構成されていったということがその過程に即して捉えられているわけです。こう

20 コメント

いう内容は、僕たちのようなものが読んでも大変興味深いものだし、そこに引かれている史料や事実などは、僕らのようなものも興味を持てることができます。ただ、私がもう少し知りたいなと思ったのは、19世紀の半ばにある転換が起こったというんですが、そうだとすればそれ以前においてはこの叛乱はどのように伝承されていったものであり、19世紀半ばにおいてはどういう転換が起こったのかということ、そういったことがもう少し詰めて説明されてもいいのではないかと思います。転換が起こった後での国民主義的な記憶という面は、うまく説明されていると思いましたが、それはそれ以前との関係ではどうなのか、十分には説明されていないのではないかと思います。

こんなことをいうのは私の頭の隅っこに、百姓一揆の義民の物語があるからで、百姓一揆の指導者ははじめから地域の人々によって共通に顕彰されたのではなくて、これは非常にアンビバレントなもの、つまり一方では記憶しなければいけないし、一方では排除しなければいけないものであったわけです。下意識的なものも含めて民衆の心の中にこうした葛藤があって、そこに例えば飢饉だとか疫病だとかが起こると、それは犠牲になった指導者をちゃんとその祀っていないからだとされて、義民を地域社会全体として祀るという方向に転化していくわけですね。だから、抑圧された事件とその指導者が共通に記憶されるためにはかなり複雑な過程が存在するわけで、そういったことがもう

少し論じられるべきじゃないかな、という意味なんです。ただこの点についてはですね、『クアドランテ』所載の工藤さんの論文の中に、ジュタール自身がこの叛乱についての詳しい聞き取り調査をおこなったということが紹介されておりまして、その内容をみるとなかなか興味深いものがあると思います。だから、そうした材料もとあげて編成しなすと、この論文の全体の雰囲気はかなり違ったものになるのではないかなと思いました。

次に、ピエール・ビルンボームをとりあげます。これは、フランスではユダヤ人がどのように表象されてきたかということを論じているわけですが、1789年の革命を境にしてユダヤ人はフランス社会の中に統合され、フランコ=ユダイズムとでも言うべきものが形成されたとされています。だが、まあ一般的な動向としてはそうなんだけれども、それにもかかわらず、知識人も含めて反ユダヤ主義が持続されており、社会の中で排除される契機が反ユダヤ主義という形をとって表現されていく。そして、ヴィシー体制のもとではユダヤ人迫害は大変厳しいものがあったわけですが、しかし一般の国民はユダヤ人を援助したという面もあった。そういう複雑な事情を踏まえて、戦後のフランスでは強制収容所の記憶が抑圧され、結局はフランスの共和主義的な伝統の枠組みのなかにユダヤ人が統合されて、フランコ=ユダイズムというものが基本的な流れとなった。そこにいろいろ複雑な過程はあるけれども、基本

線はそういうものとして捉えることができる
 というようなことだと思います。これもユダヤ
 人問題のフランス的な特徴を多面的に分析し
 ていて、大変興味深く読みました。しかし、国
 民的合意の側面が強調されていて、例えば現代
 のパレスチナの問題も含めると一体どうい
 うことになるのか、というふうなことを、これは
 論文の外側からの意見になるかもしれませんが、
 そういうことを感じました。また実際にフ
 ランスの中でも、ユダヤ人社会にもいろんな流
 れがあって、最近では行動的で情熱的なセファ
 ルディという若いユダヤ人の活動が生まれて
 きているということも記されておりますので、
 そういう側面を強調していくと、フランコユ
 ダイズムの国民的合意というものにも亀裂の
 側面を指摘することができるのではないだろ
 うかと思いました。

次に、アラン・コルバンの「パリと地方」と
 いう論文を取り上げます。これは、パリと地方
 が相互にどのように表象されてきたかという
 ことを、たくさんの史料を縦横に使って跡付け
 たもの。容易に予想できることだと思いますけ
 ども、18世紀にはパリの中心性が強く表象され、
 革命の時代にはパリは反逆分子の巣窟だとか、
 場合によってはパリには快樂主義がはびこっ
 ていて暗黒の首都だとか、そういう否定的なイ
 メージになることもある。しかし全体としてみ
 た場合には、パリがフランスの中心であり優越
 しているということが強調されているように
 思いました。そのこと自体については、そうい

うものかなという以外に無いんですけど、これ
 までとりあげた2つの論文とややニュアンスが
 違うように思いました。と言いますのは、先の
 2つの論文では、反乱なりユダヤ人なりという
 フランス社会にとっては異質的なものがどう
 いうふうに国民国家的統合へと編成されてい
 くかという側面のほうが強調されていますが、
 この論文はそのことはあまり強調せずに、パリ
 と地方とは基本的には対抗的に取り扱われて
 いるからです。首都と地方が相互にどのように
 表象されていくものかということについては、
 いろんな論点があるかと思いますが、国民
 国家的な統合的記憶の形成という視点から扱
 うことも可能ではないかと思います。これは翻
 訳者の方も指摘されていることですが、日
 本では成田龍一さんの『「故郷」という物語』
 があって、そこでは、地方というものは東京へ
 出て行った、実際には日本の近代文化の重要な
 担い手になるような青年知識人が、国民国家的
 統合性の立場から地方をどう表象するかとい
 う側面に重点を置いた分析がおこなわれてい
 ます。これと似たような立場から首都と地方を
 論ずるということは、おそらくフランスでも可
 能なのではないのか。また、首都のほうから地
 方を論ずることもできるし、地方のほうから首
 都を論ずることもできるのではないかと、思い
 ました。

次に、ジャン＝マリ・マユールの「アルザス
 ー国境と記憶」という論文です。アルザスとい
 う地方は現在も地域への帰属意識が最も強く、

22 コメント

フランス革命によりフランス国民主義のほうへと傾いた。しかし、普仏戦争の後ではドイツへの忠誠心も生まれた。しかしまた、20世紀にはいるとそういう複雑な事情におかれたアルザス地方では、自治主義が強化されて、ヨーロッパの架け橋とか交差点とかということを積極的に主張するようになった。そこに、この地域の独自のアイデンティティがあると、まあ、だいたいこのような内容かと思いました。しかし、私は、日本史で類例を思い浮かべることができなかったで、これはそういうことかなと理解いたしました。

ところでこの4つの論文を読んでみた感想を、レジュメに少し書いておきました。コルバンの論文はやや違うように思いますけれども、それぞれに独自の経験の場をもった個別の記憶が共和主義的国民主義へと編成されていく過程が、主要な分析の課題になっていると思います。したがって国民化された現在の記憶は、個別の経験や記憶の置き換え、忘却、隠蔽などであり、歴史はそうした過程を暴露的に捉えるもので記憶と歴史は対立する、ということになると思うんです。そしてそのことはノラ自身が、これは谷川さんのお話にもあったかと思いますが、記憶と歴史は同義どころかあらゆる点で相反する、歴史の真の使命は記憶を破壊し抑圧することだというふうにその論文の最初のほうで述べておいて、そういう考え方にぴったりあっていると思うんですね。しかし、記憶のなかにも、さまざまな記憶があって、国民的通念とな

っている現在の記憶とかつて存在した記憶との間には大きな違いがあって、そこに置き換えや忘却や隠蔽などがあるということ、これがつまり以上述べた4つの論文が論じていることだと思うんですけども、その側面はノラはあまり重んじていないのではないかと、思いました。そこらあたりは、もう少し理論的にも展開できる点があるのではないかとということです。

次に、ノラの「記憶と歴史のはざまに」という論文について少し感想を述べたいと思います。でも、この論文は大変難解で（笑）、素人が読解するのは間違いのもとかと思えますけれども、あえてどんなことが書いてあるかということ、自分なりに考えて、日本史にひきつけて少し意見を述べたいと思います。まず論文の要点ですが、レジュメにはごく単純な要約をしてみました。つまり、共通する記憶を支えていた共同体、典型的には農村共同体が崩壊すると、記憶と歴史が対立するようになる。そういう状況の中で、記録によって捉えられた地域研究とか博物館とか記念館とか、そういう形で捉えられた第二次的な記憶、個別的地域的な記憶というものが生まれるようになり、そういうことを記憶したいという強迫観念が生まれ、より複雑化し多元化した記憶の場が構成されることになり、そこに固有の意味での歴史が生まれる。そういうものを分析することをこの本は課題にしているんだと、そんなようなことが書いてあるのではないかと思いました。

そこで、このような歴史意識とでもいうべき

ものを、日本の歴史学と対応させてどんなことが考えられるかということをその次に少し書いてみました。まず、谷川さんが『思想』に書かれた論文を拝借して整理し直すと、一応4つの段階が歴史と記憶との関係にあるといえる。第1は歴史と記憶が一致していた段階で、大革命以降の国民主義的な歴史像とそれを支える実証主義的な歴史学。実証主義を方法として国民主義の中に参加することによって、歴史学はアカデミズムの中に地位を獲得した。ところがそのようにして成立した歴史学が、アナール派の台頭以後に分裂を起こして、国民主義的な記憶としての歴史から社会というものが分離された、あるいは社会や経済が分離されて独自の研究対象になった。これが第2の段階です。そして、68年5月の衝撃、それがどういう意味を持っているのかは必ずしも良くはわからなかったのですが、その頃から文化人類学を援用した新しい社会史や文化史が生まれた。これが第3番目の段階で、現在はそういう社会史や文化史も組み込んで、いわば反省的に歴史の流れを検討しなおす史学史的な段階に到達した。これが第4番目、自分たちの現在の立場だ。だいたいそんなふうに整理できるのではないかと思います。

さてそこで、こういうような整理を強引に日本の歴史研究に適用と比較してみますと、日本はマルクス主義の影響が強いことが特徴でしょう。日本史研究へのマルクス主義の影響は1920年代後半からはじまるわけですから、上の

4つの段階から言えば第2段階に属するわけですが、日本における日本史研究に関する限りで言うと、マルクス主義の影響が強い分だけ、第2段階との対比では、3番目と4番目の段階はちょっとばやけているわけですね。例えば、日本にも68年ごろはげしい学生運動があったのですが、その学生運動の中からでてきた優れた西洋史の研究者はいたと思うけど、優れた日本史の研究者は（笑）、まあいなかったというといけないけど、あまりいなかった（一同苦笑）。だからそういう点で、日本における日本史の研究にはやや特徴があります。しかし大雑把に言えば、フランスとほぼ並行する流れがあって、現在は第4の史学史的な段階に入ってきていると思うんですね。日本史のほうでそのようなことを一番先頭に立ってやってるのは、今日も会場にきていらっしゃる成田龍一さんで、日本のピエール・ノラは成田さんと（一同笑）、いうことになると思うんですね。でも成田さんだけじゃなくて、例えば、磯前順一さんという人もやっているし、関西のほうにも史学史的な関心を持っている人がいますし、それから最近出版されている『展望日本歴史』というシリーズがありますけど、これは非常に大部なもので、それぞれの問題についての戦後の主要な研究論文のさわりの部分がほとんど収録されていて、とても便利なものなんですね。こういう便利なものが出るということは、研究状況そのものがちょっと行き詰っているから（苦笑）、しばらく時間稼ぎをしようという魂胆かなとも思い

24 コメント

ますけれども、でもそういうものが出たということも、一種の反省の段階が来ているということかなと思うわけです。

しかし、日本の場合には国民主義的な記憶というようなものが、どれくらい共有されたものであるかということを考えてみると、どうもそここのところはあまり明確ではない。『記憶の場』でとりあげられている様々な問題で、同じようにとりあげることでできる問題はいろいろあります。例えば、地方に博物館や記念館のようなものがたくさんできるとか、自治体史が編纂されるとか、地域への関心が増えてきているとか、家系といったものを調べる人が増えたとかですね、あるいはやろうと思えば、甲子園野球やプロ野球の歴史だとか記憶だとかの研究もできるでしょう。いろいろできるとは思いますけれども、しかし、たとえば、『記憶の場』の三色旗やラ・マルセイエーズの分析に対応させて、日の丸と君が代を論じようとしても、なかなかうまくいかないように思います。日の丸と君が代には三色旗やラ・マルセイエーズに対応するような国民主義的記憶が存在しないから、なかなかうまく分析できないということではないでしょうか。つまり日本の場合には、簡単に共通の記憶あるいは共有された歴史意識というものとは成立しないということがあるので、日本のピエール・ノラはもう少し工夫をしないと日本版『記憶の場』をつくることはできないのではないかなと思うわけです。

それで問題は、なぜそういう共有された国民

的記憶は日本では成立しにくいのかという問題でありますけれども、これは非常に単純に割り切って言うと、戦争体験というものを巡って歴史に媒介されたいわばやや建前的な公共的記憶と個々人がもっている個別的な記憶との間に原理的のといってよいほどの断裂があるからだと思うんです。どうしてこのようなことになるかという、日本は戦争に負けたということ、つまり戦争体験をどう受けとめるかによって、日本人の歴史意識には根本的な断裂が生まれてくるわけでしょう。これはまた自分の国が行なった戦争や植民地支配や対外関係などをどう受け止めるかということでしょう。しかしこの本では、対外関係や植民地支配や外国人労働者などにはほとんど言及されていないので、国内的な国民主義への傾斜があり、そうした国民国家的な枠組みの中でのポリフォニーへとまとめられている。国民の歴史意識において断裂があるとかまとまりがあるとかという問題は、日仏のお国柄の違いというふうに言ってしまうのはおそらく言いすぎであって、原理的には共通するところがあると僕は思うんです。それはつまり、その当該社会にとっての外部に当たる問題を組み込んでいるかどうかということで、組み込めば断裂面が強くなる。戦争と暴力というものは、そういう外部性、歴史の否定性というものを典型的に表現するものでありますから、戦争と暴力を組み入れればどうしても断裂面が強調されることになります。ついでにいえば、このシンポジウムに先立つシンポジ

ウムの記録が、この2冊の『クアドランテ』に記されていますが、そこで主としてとりあげているのは戦争の記憶ですね。戦争の記憶というのはそれはもう絶対的な否定性と関係があるわけで、そういう記憶といわばわれわれの日常意識における歴史意識との間に大きな断絶があるということは、ほとんど不可避的なことでしょう。だから戦争を組み込んだ歴史意識と、それを一応除いて、現在の平和なわれわれを焦点においてものを考えた場合とでは、話が非常に違ってくるわけで、そこには原理的に重要な問題があるのではないかと思います。

レジュメの最後の方は省略したほうがよいのですが、ちょっとだけ説明します。私自身は表象分析を中心にしてやっていくということは、だいたい納得できる。そう言われてみると、自分もそういうふうに来てきたような気がします。しかしその場合、歴史的な世界の構造的な全体性とでも言うべきものを歴史家の想像力として思い描きながら、個々の表象を分析している、と思うわけです。こうした立場から、非常に乱暴に、19世紀半ば以降の近現代の世界史をどのようなものとして捉えるかということとをレジュメに書いておきました。これはいわば、長い20世紀論にあたるもので、19世紀半ば以降の世界史は、資本主義的な世界システム、国民国家、家族を中心とした生活世界という3つの局面を持った構造的な全体性として捉えるのではないかと考えるわけです。そうするとこの本でとりあげているのは、ほとんどが第

2局面であり、しかも研究の進展に伴って、ますますそのような方向へ進んだということがノラの総括的な論文にも書いてある。先ほど谷川さんも引用されたところですけども、「コモラシオンとは対抗的なタイプの歴史書であろうとしたのだが、コモラシオンのほうがこの本を捕えてしまった。コモラシオン現象の統御を目的とした試みまでも呑み込んでしまうほど、コモラシオンへの欲望のほうが強かった」というわけです。ノラの序論は、「記憶と歴史のはざまに」という題で、その主題は記憶と歴史の対立ということだったのに、この記憶と歴史の対立という最初の問題設定はどこへいったんだろうなというあたりが、僕がよく理解できなかったことです。

(やすまる よしお)